

審査員賞

中学生部門

愛知県東海市

東海市立上野中学校1年

立川 花帆

恩師の言葉

私には、ある宝物がある。小学六年生の時に、週末の宿題としてよく出されていた「日記」だ。その日の出来事を書いて提出すると、担任の先生が赤ペンで返事を書いて返してくれる。ただ、私の日記は少し違った。隅の空いたスペースに先生への手紙を書いていたのだ。ある日は先生への質問、ある日は四コマまんが、ある日は悩みの相談、など。一つ一つ優しく、時には面白く返事を書いてくれる先生のこと、私は大好きだったし、この日記には本当に何度も何度も救われた。

特別、思い入れの強い言葉がある。それは、私が姉の誕生日をきっかけに、姉に対しての普段は口にはできない思いを書いた時の先生の返事。

「自分の周りには支えてくれる人がいる。共に、喜び、悲しみ。辛いこともあるけど生きていけば楽しいこと嬉しいこともある」

この言葉を見たたん、いつきに涙があふれ出てきたことを今でも覚えている。人間関係がうまくいかなくて悩んでいた私。表面では笑っているものの、毎日が辛かった。そんな時にくれた先生の言葉は、私に生きることの喜びを教えてくれた。希望を与えてくれた。「自分は一人じゃないんだ」そう気づかさせてくれた。私を、救ってくれた。

今まで、言葉の魅力について、あまりにも身近で深く考えたことがなかった私は、この日記から言葉の大切さ、素晴らしさを学んだ。そして、言葉に助けられた。小学校を卒業して以来、日記は時が止まったかのように何も書きこまれなくなってしまったが、私は今でもその日記を見返すことがある。「あんなこともあったな」「こんなこともあったな」なんて思い出しながら、私はそのページに刻まれた赤ペンの字を、私の人生の恩師になるであろう先生の言葉を、ゆっくりと噛み締める。